

# キーボードによる日本語入力操作技能習得への阻害要因 —日本語ワープロ黎明期のビジネスにおける性的役割分業が利用者にと与えたもの— What hindered the Improvement of Keyboarding Skills in Japan

長澤 直子<sup>1</sup>  
Naoko NAGASAWA

<sup>1</sup> 立命館大学社会学研究科 Ritsumeikan University

**Abstract** In the early stages of Japanese word processors, almost all of operators were women. It was because there was a gendered division of labor in business from the Taisho era to the Showa era. Even now, many people are not good at keyboard operation, and recently it has also led to social problems that has kept young people away from PCs.

**キーワード** 日本語入力, キーボード, タイピング, ジェンダー, 日本語ワープロ

## 1. 研究の背景

現在、パーソナルコンピュータ（以下、PC と表記する）での文字入力には、キーボードによるかな漢字変換システムが標準的に用いられている。

この仕組みは、日本語ワードプロセッサ（以下、ワープロと表記する）の誕生と共にその歴史がスタートした。日本初のワープロは、1978 年秋に発表され、翌 1979 年 2 月に発売された東芝 JW-10 であったが、その発売から今日までの間には 30 年以上の月日が流れている。日本語ワープロの開発コンセプトの基本は、東芝の技術開発者であった森健一によると (1)文章を手で書くよりも速くタイプできるものであること、(2)装置はポータブルにして、どこにでも持ち運べること、(3)タイプした内容は電話を通じて遠隔地に伝送できることの 3 点であったとされている<sup>1)</sup>。また、誰もが手軽に文章を効率よく書くために開発されたものであるということも強調している<sup>2)</sup>。このうち(2)および(3)は現在のスマートフォンで実現できているが、(1)の「手で書くよりも速く」という点はキーボード操作に習熟しないと困難であり、誰もがその恩恵を受けられてはいない。「手で書くよりも速く」という基準をクリアできるだけの技能を身につける訓練機会が、多くの人に与えられなかったからである。そのため、日本では多くの人がキーボード操作を苦手としている。

さらに近年では、スマートフォンの普及に伴って家庭内での PC 所有率が下がってきていることや、高等学校での普通教科「情報」の指導要領が改訂されたことなども伴って、PC を使う機会が少なくなっている若者がキーボード操作技能を習得できないまま社会人になり、困難な目に遭うという社会問題が発生している。最近では、「大学生の 7 割以上が、PC スキルに自信なし<sup>3)</sup>」「スマホ世代の PC 知らず、スキル低下、職場で波紋<sup>4)</sup>」などといった記事がマスコミを賑わすようになってきた。記事の中では、「パソコンのタイピングを片手でしかできない学生が目立つようになった」といったことも指摘されている。

では、日本では、なぜ誰もがキーボード操作技能を習得できる方向に向かわなかったのだろうか。

## 2. 先行研究

日本語ワープロ黎明期における技術開発者によれば、日本人がキーボード操作を苦手をしているのは「日本人はまだキーボードに慣れていないから<sup>5)</sup>」、あるいは「鍵盤の方に問題があり、日本人が日本語を入力するのに最適化されてないから<sup>6)</sup>」といったことが理由であるとされていた。確かに JIS 配列キーボードは日本語との親和性が高くないため、それらも理由のうちではあっただろう。

利用者側からは、「今後は学生時代からキーボードに馴れた人々が主流になるだろう」という楽観的な言及もあったが<sup>7)</sup>、これらは物事が熟していないからこそその希望的観測であった。その後 30 年以上が経過したが、「まだキーボードに慣れていない」と言われていた日本人は未だにキーボードに慣れることができず、若い世代が「学生時代からキーボードに馴れる」ことも実現していないからである。

## 3. 研究の目的

日本語ワープロ黎明期の先行研究では、キーボードの配列が悪いということと、日本人がキーボードに馴染んでいないということが主な焦点とされていた。しかし、30 年以上の年月を経た今になって振り返ってみると、この当時の社会的背景、特にビジネスにおける性的役割分業とも言うべき仕事上の役割分担が利用者の意識を制限していたことは見過ごされがちである。

日本においては、1985 年に男女雇用機会均等法が制定された。同法は翌 1986 年より施行開始となり、数回の改正を経て現在に至っている。それまでは、女性保護のために時間外や休日労働、深夜業務などの規制が設けられていたが、この法律により撤廃されている。そのため、1985 年までの日本では、女性にとって仕事の選択の幅が大きいとは言えない状況であった。仮に正社員として働いても管理職にはなれなかったり、給料も男性より少額であったりしたことはよく知られて

いる。ただ、本稿において扱う性的役割分業はそういった男女差ではなく、ビジネスの中で、職種として女性が圧倒的多数を占めていた仕事が存在していたということである<sup>8)</sup>。

現在の PC やスマートフォンにおいてかな漢字変換という技術が使われ続けていることを考えると、日本語入力についてはワープロの黎明期から現在までの道程が地続きである。そのため、今日の日本においてキーボードによる日本語入力技能の習得が上手くいっていないことの原因を考察するためには、この間の歴史を丁寧に辿る必要があるが、特に黎明期においてはジェンダーの視点を避けて通ることができない。なぜならば、日本語ワープロの前身ともいえるべき邦文タイプライターがほとんど女性によって操作されていたからである。日本語ワープロの発売当初は、邦文タイプライターの置き換え商品として提案されていた。その邦文タイプライターを操作する仕事を担っていたタイピストは大多数が女性で占められており、そのことによって初期のワープロオペレーターが女性中心となったからである。

そのため本稿では、多くの日本人がなぜ、今なおキーボード操作技能をうまく習得できないのかということの起源を探るため、まずワープロの前身ともいえるべき邦文タイプライターおよびタイピストについて触れた上で、日本語ワープロ黎明期（主に 1980 年代前半）の文書処理の現場における性的役割分業とその影響を受けた利用者の行動を、文献調査によって明らかにする。そして、当時の人々にとって、技能習得が阻害されることになった要因を考察する。

#### 4. 日本語ワープロ誕生前の文書処理－タイピスト

日本語ワープロ誕生前における日本語の活字化作業は、1915 年（大正 4）に発明された邦文タイプライター（図 1）によって行われていた。そして、その作業を担っていたのがタイピストであった。

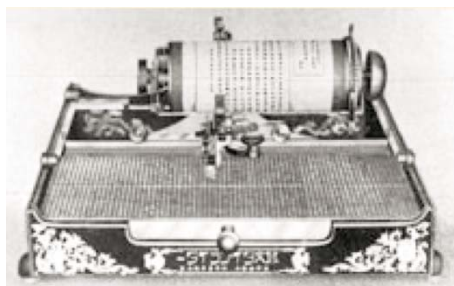


図 1 邦文タイプライター（出典：特許庁サイト）

タイピストはそのほとんどが女性で、男性が文書を手書きしてそれを女性タイピストが浄書するというプロセスが大正時代から存在していた。タイピストになるには、タイピスト学校での 4 か月～6 か月程度の訓練を経て技能を習得する必要があるが、女性にとっては高給が得られる専門技能職として人気があった。1920 年代には、既に性的役割分業が確立されつつあったのである。

海外（特に米国）においても同様の役割分担が存在していたが、ただ、英文の文書処理と日本語の文書処

理とでは書類を仕上げるまでにかかる時間が異なっていた。10本の指を使ったタッチタイピングが可能な英文タイプライターは、邦文タイプライターに比べて極めて短時間で印字することが可能だったからである。そのため、英文の文書処理では、男性が手書きした原稿を女性秘書やタイピストがタイプで打ち、それを校正して再度タイプで打って仕上げるという方法が確立されていた。そして、日本ではこの高速な文書処理が理想とされていたのである。

こういった背景の中で日本語ワープロが開発され、商品化されたが、その黎明期においては開発者のコンセプトと利用者の認識との間にかい離があった。それは、タイピストが女性中心の仕事であったことと無関係ではなかったのである。

#### 5. 女性利用者中心の日本語ワープロ黎明期

##### (1) 「女性による浄書機」という認識

まず、日本語ワープロの誕生当時におけるメーカーの売り込み方と、そのことが利用者にとどのような認識を与えたのかということについて見ていく。

先にも述べたとおり、日本語ワープロの1号機は東芝 JW-10 であり、価格が630万円であった。ハードウェアはミニコン TOSBAC-40L が母体とされたため、事務機サイズの大きなものであった<sup>9)</sup>（図2）。



図 2 東芝 JW-10（出典：東芝未来科学館サイト）

このマシンには JIS 配列キーボードが搭載されていたため、ディスプレイとキーボードおよびプリンターがセットになった、現在の PC の基本形にもつながる形状であった。しかし、この当時、東芝に追隨する形で多くのメーカーがワープロ業界に参入する中、キーボードを搭載していた機種は意外に多くなかった。当初、参入企業の中でキーボードによるかな漢字変換方式をとっていたのは東芝、富士通、キヤノンの3社のみで、他社は入力方式として主にタブレット（ペンタッチ）方式を中心として採用していたのである。タブレット方式とは、邦文タイプライターと同じインターフェースを持つ、全文字配列型鍵盤のことである。東芝 JW-10 が発表された前年、1977 年のビジネスショウにキーボードによるかな漢字変換方式の試作機を展示したシャープも、最初に発売したワープロ WD-3000 ではタブレット方式を採用していた（図3）。その理由は邦文タイプライターのリプレース市場を狙ったからというものであった。いきなりキーボードの製品を出しても抵抗が

大きいからという理由もあったという<sup>10)</sup>。

メーカー側の販売戦略として、海のものとも山のものともつかないような高価な機械を売るためには、既製のものが形を変えたように装うことが確かに得策ではあっただろう。しかし、各社とも社内ではキーボードによる入力について研究し続けていた。シャープにおいては、かな漢字変換の悪口を言うのだけはやめようということで意思統一をしていたという。そうしないと、次にかな漢字変換モデルを出したときに自己矛盾を起こしてしまうからというのがその理由であった<sup>11)</sup>。この状況は、新たなマシンを世に送り出し、それを販売しなければならないメーカー側の苦悩を表している。新しい仕組みを世に知らしめ数多く販売するためには、マーケティング上の戦略が必要だったからである。そのため、キーボードの方が効率よく入力できることが分かっているが、あえて邦文タイプライターと同様のインターフェースを持たせて、置き換え市場を狙って販売していったのである。

発売当初の売り込み方が邦文タイプライターの置き換えとなれば、当然、利用者の意識は「女性による浄書機」となる。タイピストが専門技能を持った女性の仕事であるという認識が、長年の実績によって植え付けられていたからである。実際に、発売当初の広告等に掲載されていたオペレーターのモデルは女性が多かった(図3)。このことは、キーボードを採用していたメーカーにとって、日本語ワープロの開発コンセプトを利用者にうまく伝えられない状況を作り出した。誰もが文章を効率よく書くために開発された機械であったにもかかわらず、利用者には邦文タイプライターと同じように女性が手書き原稿を浄書するための機械であるという認識を持たれる結果となったからである。



図3 シャープ『書院』雑誌広告

(出典：『月刊総務』1981年8月号)

ただし、やがてこれらのメーカーが入力インターフェースをキーボードに収斂させていくまでには、そう長くはかからなかった。1983年頃には、一部の専門家向けを除いてJIS配列キーボードによるかな漢字変換

方式にほぼ統一されている<sup>12)</sup>。

## (2)若い女性を中心とした操作技能習得

次に、日本語ワープロが徐々に認識され、邦文タイプライターから置き換わりつつあった時代における利用者の操作技能習得について、女性のための就職・転職雑誌『とらば一ゆ<sup>13)</sup>』を通して見ていく。

東芝JW-10の発売から2年と少しが経った1981年夏頃の記事を参照すると、この当時はまだ邦文タイプライターと日本語ワープロが併存していたことが読み取れる。たとえば、同誌1981年7月31日号において「シリーズ職種ガイド 和文タイピストの世界<sup>14)</sup>」という特集が組まれている。まだワープロが値段も高価でオフィスへの普及途上期であったこの頃、全国タイピスト学校連盟の会長であり中野スクール・オブ・ビジネスの理事長でもある盛本敏夫は、ワープロによる日本語のスピーディな文書化は大きな魅力だが、レイアウトの問題からどうしても1行20字のところに24字入れなければならないようなケースでは機械では処理できないため、よほどのことがないかぎり和文タイピストの需要はかわらないだろうと述べている。職種として消えゆくものという認識がなかったことは、同日号の記事に「和文タイプ3級の資格があれば就職できる」という記述があったことからも読み取れる。

その約2か月後となる1981年9月18日号、同25日号の2号に渡って、「ワードプロセッサの出現で女性たちは・・・」という特集記事が組まれている。そこでは、タイプ歴12年というベテランタイピストが、「ワードプロセッサは、和文タイプに代わるものではありません。目的と用途が違いますから」と発言している。その理由は、正式な契約書はワードプロセッサでつくったものでは有効とはならず、美濃紙を使って、活字も和文タイプで打ったものが求められるからというものであった。また、特許申請の公式文書も、和文タイプによる印字でなければならないとされていることを理由に挙げている。

一方この頃、東芝が運営する日本語ワードプロセッサ・スクールにおいては、大手企業や銀行、公官庁から大量に受講者が送り込まれていることや、申し込んでから3か月は待たなければならないことなどが記されている。その生徒の男女比については、和文タイプの教室と同じく圧倒的に多いのは女性であり、その内訳として、95%が20代の学生、OLの女性であったとされている。加えて、青田買いが出るほど就職率が高く、中野スクール・オブ・ビジネスが送り出した卒業生は、日本IBM、本田技研、日通などの大手企業に就職したとのことである。まだ資格制度等も創設される前の出来事であるが<sup>15)</sup>、日本語ワープロという未知のマシンに対して興味を持ち、その将来性を感じた若い女性たちは、いち早く技能習得に乗り出していたことが読み取れる。

これは「邦文タイプライターの操作が一般的な学校教育では得ることのできない特殊な技能で、タイピスト学校で技能を習得をした上で仕事を得るもの」という大正時代から長く続いた教育の仕組みを、日本語ワープロに置き換えた解釈である。邦文タイプライター

からの置き換えという認識は、機械そのもののみならず、教育体制までも受け継ぐ結果をもたらした。さらに、教育を受けようとしていたのがほとんど女性であったのは、ビジネスにおける性的役割分業が確立されていたことによる影響であると考えられる。

このように、日本語ワープロの黎明期においては、邦文タイプライター時代の解釈がそのまま受け継がれ、「原稿を書くのは男性中心、浄書するのは女性」という組み合わせが暗黙の内に形成されていた。そのことによって、キーボードのタイピングは女性の仕事であるということが当たり前であるかのように認識されていたのであった。そして、キーボードの操作技能教育はタイピストと同様に特殊な職業教育として実施されており、機械の値段が高額だったこともあって、普通教育に導入されるには程遠い状況であった。

## 6. 考察

前章までの文献調査結果から考察した技能習得への阻害要因は、次の3点にまとめられる。

(1)「手書き原稿の浄書」というビジネスプロセスが大正時代から昭和末期までの60年以上という長きにわたって続いたことは、男女間の明確な役割分担を定着させていた。このことは、利用者が持っていた「タイピングは女性の仕事」という固定観念を簡単には拭い去れない状況を作り上げた。さらに、このことによって、特に男性はワープロやキーボードに対して「自らが操作するもの」という認識に至りにくかったと考えられる。

(2)日本語ワープロは、誰もが文章を効率よく書くためのものというコンセプトで開発されていたが、発売当初にメーカーが邦文タイプライターの置き換えとして売り込むしかなかったことは、利用者には「邦文タイプライターが日本語ワープロに置き換わった」という認識を与えた。それによって、メーカーにとっては本意ではない「手書き原稿の浄書」「操作する人は女性」「特殊技能」というイメージが付きまとい、開発のコンセプトを利用者へうまく伝えられない状況になった。

(3)日本語ワープロ黎明期におけるキーボードの操作技能教育は、主にワープロメーカーやかつてのタイピスト学校が担っており、生徒はほとんどが女性であった。そのため、教育を受けていない人や、受ける機会の乏しい男性にとっては、興味を持って少しキーボードを触ってみようと思っても、思うように操作ができずに悩む結果となったことが考えられる。つまり、男性を中心とする多くの利用者は、一から操作技能教育を受けないことには手書きより速く入力することが叶えられなかった。このことが、現在でも多くの人がキーボード操作を苦手としていることへの第一歩となったのである。

これらの状況を総合的に考えると、男女間に意識の差が存在したことや、特に男性にとっては技能習得への道が広く拓かれていなかったことが、現在の状況への入口となっていたことが分かる。

## 7. おわりに

大正時代から続いていたオフィスでの仕事上におけ

る性的役割分担は、初期の日本語ワープロのオペレーターをほぼ女性に限定する結果をもたらしていた。そのことは、仕事で1人1台のPCを使用するようになった現在においても多くの人がキーボード操作を苦手とする状況の起源であり、昨今起こっている若者のPC離れという社会問題にもつながりを持っている。

なお、日本語ワープロ黎明期にはJIS配列キーボードが日本語入力をやり辛くしているという認識のもとにさまざまな形状のキーボードが開発されたため、標準化が遅れたことも要因の一つであった。このことについて検証するのは、今後の課題となる。

## 註と参考文献

- 1) 森健一・八木橋利昭(1989)『日本語ワープロの誕生』丸善, p.11.
- 2) 森・八木橋(前掲書), p.5
- 3) NECパーソナルコンピュータ株式会社「若者=デジタルネイティブは本当? 大学生の7割以上が、PCスキルに自信なし」<http://nec-lavie.jp/common/release/ja/1702/0704.html> (2017年6月閲覧)
- 4) 「スマホ世代のPC知らず、スキル低下、職場で波紋(かれんとスコープ)」『日本経済新聞』2016年3月13日朝刊
- 5) 神田泰典(1985)『コンピュータ知的「道具」考』日本放送出版協会(NHKブックス), p.147
- 6) 森田正典・丸山和光(1988)『日本語だから速く入力できるワープロ時代に問うM式キーボード』日刊工業新聞社, p.18
- 7) 紀田順一郎(1985)『ワープロ書齋生活術』双葉社, p.42
- 8) 今日ではほとんど姿を消してしまった電話交換手やタイピストといった職業は、1980年前後においてはそのほとんどを女性が担っており、男性中心のビジネスにおいて女性がこういった補助的な仕事に従事するという役割分担が作り上げられていた。そして、日本初のワープロの発売は1979年であったため、その黎明期は男女雇用機会均等法の施行直前期と一致している。
- 9) 情報処理学会 コンピュータ博物館「日本語ワードプロセッサ【東芝】JW-10」<http://museum.ipsj.or.jp/computer/word/0049.html> (2017年6月閲覧)
- 10) 古瀬幸広(1990)『考える道具』p.82-83
- 11) 古瀬(前掲書) p.83
- 12) 森・八木橋(前掲書) p.98
- 13) 同誌は1980年2月22日に創刊号が発売され、当時、女性のキャリア形成に着目した点で注目を集めていた。また、誌名は「女性の転職」を意味する代名詞になり、「とらば一ゆする」という流行語にもなるほどの影響力を持った雑誌である。
- 14) 『とらば一ゆ』では「邦文」ではなく「和文」タイピストと表記されていたため、ここでは原文のまま表記する。
- 15) 日本商工会議所によるワープロの検定試験制度が創設されたのは、1985年のことであった。